

藤 橋 遺 跡

— 史跡整備事業に伴う発掘調査 —

1 9 8 5

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は、国指定「藤橋遺跡」の環境整備事業施行に伴って実施した発掘調査の記録です。

藤橋遺跡は指定面積100,553平方メートルで、信濃川左岸の河岸段丘上に所在する縄文時代後期から晩期に至る集落跡で、土壌群等多数の遺構と翡翠の勾玉の未完成品が数多く発見されております。

今回の発掘調査でも、桂穴群を始めとして独鉛石、石冠、玉などが発見されました。

幸にも文化庁、新潟県の助成、援助をいただきて本調査が多大な成果を収めて完了しましたことに深く謝意を表し、今後この記録が文化財の理解と認識を深めていくうえで活用され役立つことを願っております。

最後に、今回の調査にあたり御指導、御助言をいただいた文化庁、新潟県教育委員会をはじめ、関係各位に対し心から厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸山 博

例　　言

1. 本書は史跡 藤橋遺跡（新潟県長岡市西津町字原）の環境整備事業の一環として実施した発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は長岡市教育委員会が主体となり、駒形敏朗が調査を担当し、松井潔（岡山大学大学院生）、岩崎均・小熊博史・佐野順一・小林隆幸・高橋達夫・山川史子（以上新潟大学学生）が調査補助員として調査に従事した。
3. なお、調査にあたっては文化庁加藤允彦文化財調査官、新潟県教育庁文化行政課中島栄一埋蔵文化財係長、同課横山勝栄文化財主事の指導を仰いだ。
4. 遺跡・遺構の写真撮影・実測及び、遺物の整理から図版の作成まで駒形を中心に調査補助員全員であった。なお、石器の実測には新潟大学助教授小野昭氏から御指導を賜った。
5. 本書は駒形を中心に全員で協議して分担執筆を行ない、駒形が全体をまとめた。執筆分担は次のとおりである。I・II・III 駒形、IV-1 小熊、IV-2 山川、IV-3 高橋、V-1 小熊、V-2 小林、V-3 駒形。
6. 調査記録及び出土遺物は長岡市教育委員会が一括保管している。

7. 発掘調査から本書の作成まで、文化庁・新潟県教育委員会をはじめ多くの方々ならびに各機関から御指導・御協力を賜った。特に下記の方々からは数多くの御指導・御援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表する次第である。

（五十音順・敬称略）

浅井芳伸、甘粕 健、石川日出志、石原正敏、小野 昭、加藤允彦、
金子正典、小林達雄、閔 雅之、竹田祐司、戸根与八郎、中島栄一、
中村孝三郎、中山誠二、藤巻正信、横山勝栄、若松 茂、
長岡市深才公民館、長岡市深才連絡所

目 次

I. 調査の経緯	
1. 調査の目的	1
2. 発掘調査の経過	2
II. 遺跡	
1. 環境	3
2. 発掘区の設定	4
3. 土層序	4
III. 遺構	
1. 東地区のピット	7
2. 西地区のピット	7
3. ピット出土の土器	11
IV. 遺物	
1. 縄文土器	17
2. 石器	25
3. 石製品	28
V. まとめ	
1. 土器について	31
2. 石器について	33
3. 遺構について	34

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡の地形図及び発掘区設定図	5
第3図	土層断面図	6
第4図	露I - 東地区のピット群	8
第5図	露I - 西地区のピット群	9
第6図	ピット平面図	10
第7図	ピット出土の土器及び縄文土器	13
第8図	ピット出土の土器	14
第9図	ピット出土の土器	15
第10図	ピット出土の土器	16
第11図	縄文土器	18
第12図	縄文土器	19
第13図	縄文土器	21
第14図	縄文土器	23
第15図	縄文土器	24
第16図	石 器	26
第17図	石 器	27
第18図	玉	28
第19図	石 器	29
第20図	石製品・砥石	30
第21図	縄文晩期の地域圈想定図	32
第22図	ピットの底径及び深度測定グラフ	35
第23図	露I - 東地区 想定建物跡	36

図 版 目 次

図版第1図	調査風景・出土状況	図版第6図	縄文晩期中葉・後葉の土器
図版第2図	東・西地区のピット群	図版第7図	粗製土器
図版第3図	ピット	図版第8図	石 器
図版第4図	森橋の土器	図版第9図	石 器
図版第5図	縄文晩期前葉・中葉の土器	図版第10図	石 器・石 製 品

I. 調査の経緯

1. 調査の目的

昭和53年10月、信濃川中流域における縄文晩期の代表的な集落であり、貴重な玉つくり遺跡であることなどの理由で、藤橋遺跡は国の史跡に指定された。

藤橋は史跡指定に先立ち、3回の調査が行われていた。第1回目は長岡市立科学博物館が館としての第1回目の発掘調査を昭和26年12月に実施し、貯蔵穴と考えられた土壙や縄文晩期の良好な土器・石器などを発見した。次いで、行われたのが昭和51年の試掘調査である。目的は川西地区に予想される開発行為に対処するための資料作成で、これには文化庁及び新潟県教育委員会からの指導があった。調査は藤橋を含む3遺跡を対象とした。その結果、藤橋は4地点に縄文後期から晩期の土器が分布していることが判明した。そして、第1地点は直径1m前後のビットの平面プランが数多く検出され、第2地点は縄文晩期の住居跡1基と中世の館跡が発見された。さらに、この年には藤橋の北端を通る市道の拡幅工事に伴って第1地点の発掘調査が行われた。この第3次調査で、試掘調査で検出されていた第1地点のビットが、土砂等で根固めをした柱穴であることが判明した。

藤橋はこのほかに、収集家などにより、遺物の採集が明治以来続けられていた。この中に勾玉や小玉などの玉類が多くあり、藤橋が国史跡に指定される大きな要因となった。

長岡市教育委員会は藤橋が史跡となったのち、直ちに土地買上げ事業に入り、昭和56年度に完了した。土地買上げについては文化庁及び新潟県教育委員会から「史跡の保存に適した整備を行わなければならない」という条件が付された。これを受けて、昭和58年度には文化庁及び新潟県教育庁文化行政課の指導を仰いで、文化財の保存と活用を図ることを基本理念においた「藤橋遺跡環境整備計画」をまとめあげた。今年度の調査はその基本計画を実施に移す第1段階として、遺構の露出展示予定地、及び遺跡広場・展望広場・休憩舎・遊水池などの広場・施設造成予定地を対象として実施した。なお、露出展示予定地を除いた広場・施設は昭和51年の試掘調査で確認された遺構・遺物が分布する4地点——保存地区以外に設定するよう、あらかじめ基本計画にもっておいた。

註1. 寺村光晴「新潟県三島郡藤橋の遺跡」「上代文化第26輯」1956年

2. 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館 1966年

3. 駒形敏朗他「埋蔵文化財調査報告書——藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡」

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年

4. 駒形敏朗他「埋蔵文化財調査報告書——藤橋遺跡——」長岡市藤橋遺跡等発掘調査

委員会 1977年

2. 発掘調査の経過

7月24日、現場事務所に調査器材を搬入することから、約1か月の予定で藤橋遺跡史跡整備事業にかかる発掘調査に入った。25日には最初の発掘予定地である休憩舎予定地の調査グリットの杭打ちをし、26日から休憩舎予定地の発掘調査に着手する。休憩舎予定地の発掘は28日まで行うが、遺構・遺物は発見されなかった。これと並行して、竪穴式住居跡など展示できる遺構の発見を主目的とする露出展示予定地I（以下「露I」）の調査グリットの杭打ちをする。

露Iの調査は $10 \times 10\text{m}$ に $2 \times 4\text{ m}$ の発掘区を1単位として試掘をし、良好な遺構の平面プランが確認されたら、その発掘区を中心に発掘地域を拡張することにし、30日から発掘に入った。これ以降、藤橋の調査は露Iを中心に行い、遺跡広場（8月11日～13日）、展望広場（8月20日～21日）、遊水池（8月21日～22日）の各予定地、それに露出展示予定地II・III（以下「露II・III」8月14日～20日）の調査を並行して実施した。

露IIは、露I同様に遺構を展示する予定であったが、遺構・遺物の状況が良好でないため、露IIIを設け調査を行う。が、ここも芳しくなかった。また、調査予定の関係上、遺構の露出展示は露Iだけとし、新らに調査地は設けないことにした。遺跡広場・展望広場・遊水池予定地は当初予想されたように遺構・遺物は発見されなかった。

8月に入り、露Iの一部で遺構の平面プランが検出されはじめた。それを中心に露Iの東地区で2ヶ所、西地区で1ヶ所の発掘区を拡張して調査することにした。が、当初期待した竪穴式住居跡の平面プランは発見されず、直径1m前後のピットが主であった。遺構平面プラン検出後、その位置をグリットカードに100分の1の縮尺で記入する。そしてピットを断面観察ができるよう半蔵しながら発掘する。この段階で、露Iの発掘区を東・西に各1ヶ所ずつに分けた。東地区的ピットは柱穴状のもの、西地区は皿状のものが多いという相違がでてきた。

8月28日、文化庁加藤調査官・新潟県教育委員会横山文化財主事が来訪し、今後の調査についての指導を受ける。その内容は東地区的柱穴群の対応関係をつかむことを目的とした調査を中心にするということであった。このためには東地区的発掘区を、さらに拡張して調査をする必要が生じ、翌日から発掘残土を移動して、調査を進めた。がしかし、東地区的柱穴群の対応関係は調査中にはつかめなかった。

9月に入り、半蔵したピットの写真撮影及び断面図作成の作業を行う。断面図作成が終ったピットから、ピットの全掘を行い、9月11日にはほぼ発掘が終る。あとはピット群の写真撮影・平面図作成作業及び発掘の見直し作業が残る。これも9月26日には終り、ここに藤橋遺跡の現場における発掘調査が終る。そして、27日に遺物・図面等のデータを調査器材とともに整理場へ撤収して、調査を終了することができた。

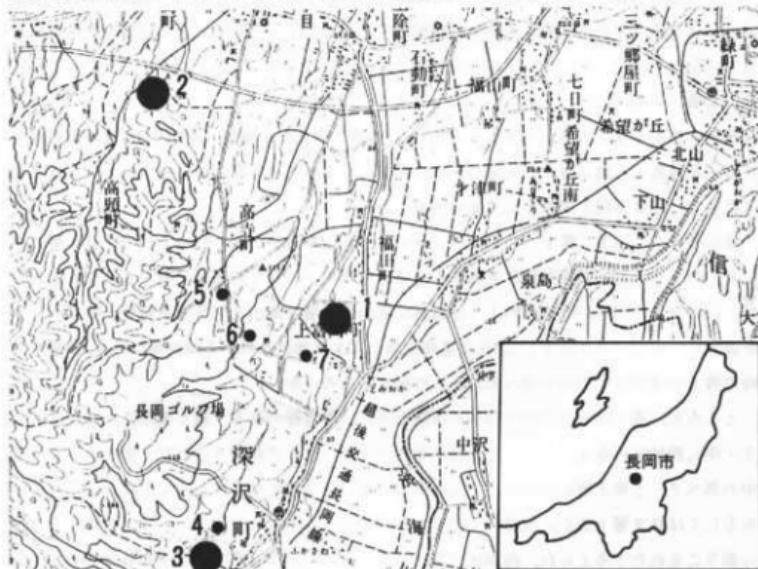
II. 遺 跡

1. 環 境 (第1・2図)

信越国境をこえると千曲川から名をかえる日本一の大河——信濃川は、長岡市以南の越路町付近で新潟平野に顔を出す。そして、長岡市の中央部を北流し、市域を東西に分けている。この信濃川の沿岸には長岡に至るまでの間——特に妻有地方を中心に多くの河岸段丘が発達している。ここ長岡市でも信濃川左岸に高寺面・関原面・上富岡面(以上は洪積世)・深沢面(沖積世)の4面の河岸段丘が発達している。また、信濃川は中流域で志久見川・清津川・魚野川を合流し、長岡市にいたって東頸城山地からの渋海川を合流している。

藤橋遺跡(第1図1)は信濃川が渋海川を合流した付近の左岸で、標高30~50mの上富岡面上に立地している。そして、南北には西の関原面から流れる小沢によって舌状台地の様相を呈している。しかし、東面する沖積地の深沢面との段差はきつくなく、ややなだらかに設している。

藤橋の周辺には、藤橋と同じ大集落の繩文中・後期の馬高・三十稻場(2・国指定史跡)・同期の岩野原(3)があり、それらの近くには繩文中期の堆打場(4)・同期の松山(6)・



第1図 遺跡位置図 (1:50,000 長岡)

同期の転堂・南原それに縄文中・後期の駒村（5）などの小規模な集落跡が点在している。また、藤橋の南には弥生中期の尾立遺跡が隣接している。これらはいずれも関原面・上富岡面の河岸段丘上に立地しており、縄文から弥生時代にかけての人々が生活の糧を求めて展開したことが知られる。

2. 発掘区の設定（第2図）

今次調査は史跡の環境整備事業に伴ない、昭和58年度に策定した基本計画に沿って実施したもので、発掘区もそれに基づいて設定した。

露出展示I・IIは整備事業の主要な部分をなすものであり、藤橋を特色づける遺構を発見することに目的を設定した。調査は $10 \times 10\text{m}$ に $2 \times 4\text{m}$ を1区画とした試掘溝を設け、良好な遺構のプランが検出されたら順次発掘区を拡張していった。その結果、露出展示Iでは東・西に柱穴及び皿状のビットが発見された。露出展示IIでも遺構が期待されたのであるが、残念ながら検出されず、新たに露出展示IIIを設定したが、ここもIIと同様であった。結局、遺構は露出展示Iの東・西で発見されただけにとどまった。

また、休憩舎・展望広場・遺跡広場・遊泳池は施設を施工するか所であり、その事前調査である。これらの施設計画は基本計画において、昭和51年の試掘調査の成果をもとに、あらかじめ遺構・遺物が検出されなかった地点を選定しておいた。このため、施設施工の発掘区からは遺構は発見されず、遺物も土器が数点出土したにとどまり、先の試掘調査の成果を裏付けることになった。

3. 土層（第3図）

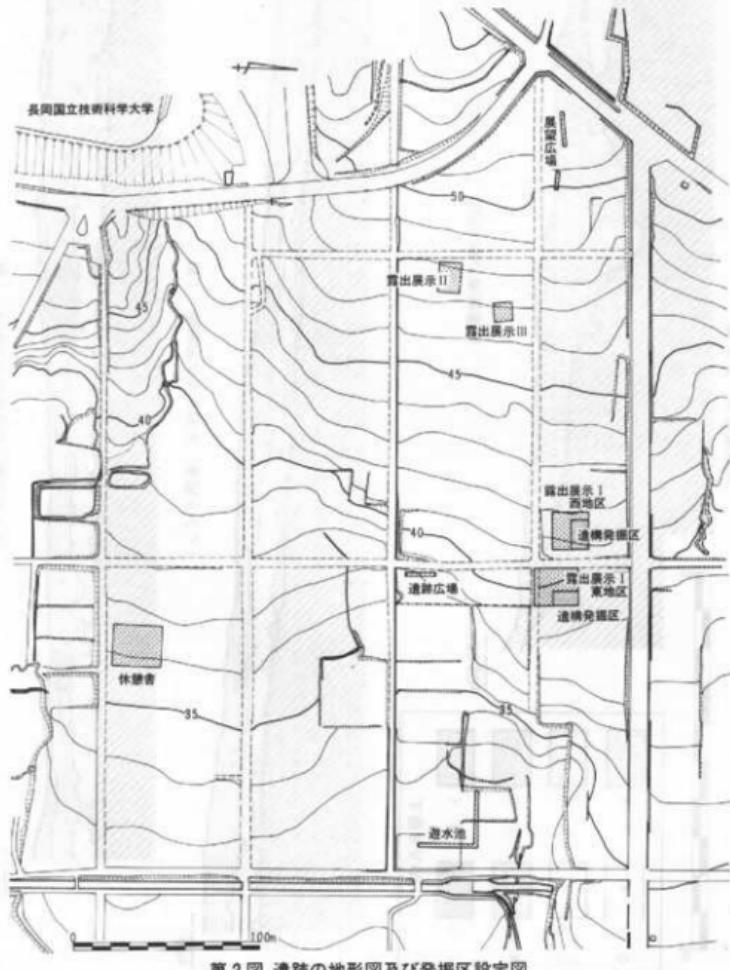
藤橋の基本土層はI層・黒褐色土（表土）、II層・黑色土、III層・茶褐色土（地山漸移層）、IV層・黄褐色土（地山層）の4層である。II層はII1とII2の2層に分層され、II1は遺物包含層で、II2は同じ黒色土でも無遺物層である。

露出展示I（以下「露I」）の東地区は地山までの土砂堆積が $10\sim15\text{cm}$ と浅く、II1層のみであった。これは昭和30年代に実施された耕地整理で、かなりの部分が削平されたと思われる。この現象を関係づけるかのように遺跡広場の最上層は地山と同質の黄褐色土のブロックが混入していた（第3図下）。これは遺跡広場が露I東地区から下る傾斜地にあり、耕地整理時の残土が遺跡広場の傾斜地へ流れ込んだ結果であろうか。

ところが、露I西地区は $40\sim50\text{cm}$ の堆積があり、本遺跡の基本土層が観察される（第3図上・中）。西地区の南北ライン（上）及び東西ライン（中）の西寄りにはII1層に土器片（岡中の黒ベタ）と焼土層がみられ、下部は無遺物層のII2層となっている。おそらく、II1層中もしくはII2層上面が、当時の生活面であったろうと考えられる。そして、遺構もここから掘りこまれたと考えられ、西地区に多い皿状ビットの深度は確認面より $20\sim30\text{cm}$ のII2層の堆積分を加えなければならないと推測される。また、西地区的東西ラインは東へ傾斜して

おり、堆積も薄くなり、露Ⅰの東地区へと続いている。この西地区の南東隅にはⅡ層の上面に地山土の堆積がみられ、ここにも耕地整理の痕跡が残されていた。

なお、耕地整理の痕跡と思われるものは展望広場にもみられ、遺跡北側の沢へ続くと思われる埋没沢が検出された。これも耕地整理で表土層を削平し、凹地を埋め立てた結果とも考えられる。

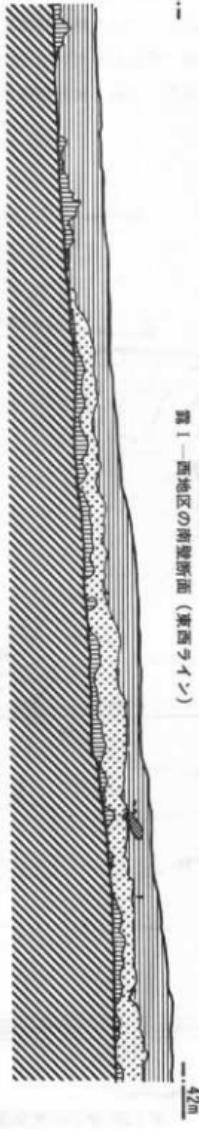


第2図 遺跡の地形図及び発掘区設定図

第1—西地区の西壁断面（南北ライン）

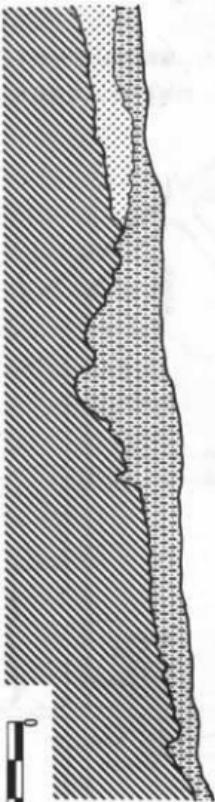


第1—西地区の南壁断面（東西ライン）



遠鉢広場の西壁断面

38.80m



第3図 土層断面図



III. 遺構

今次調査は遺跡の活用面である遺構の露出展示のため、市民に理解されやすい竪穴式住居跡や埠跡などの遺構を検出することを第1の目的として行った。しかし、遺構はピットだけで、市民に理解しやすいものは発見されなかった。また、地山面での黒色土の広がり——遺構の平面プランだけをみると、竪穴式住居跡と思われる規模のものがあった。これを発掘してみると、P3・P15・P6・P34などのように大ピットといくつかのピットとの重なりあいであった。

次に今次調査で遺構を発掘した露Iの東地区と西地区的ピットの様子をみてみよう。なお、ピット番号は東・西両地区を通じての一連番号である。

1. 東地区的ピット（第4図・第6図）

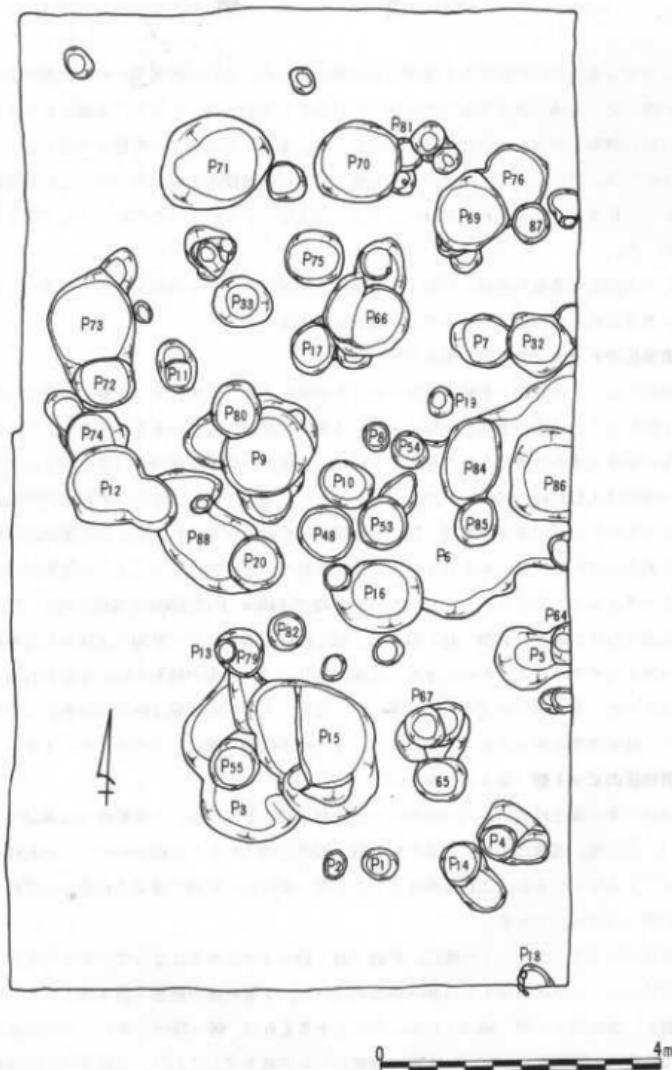
東地区的ピットはP12・P66・P70～73（第6図）のように黒色土（1層）が縦に入り、それを囲むように地山の黄褐色土などの2～4層の土砂が入っているものが多い。これは昭和51年の第3次調査で確認された掘り方と柱痕との区分が明瞭な柱穴にはかならない。この柱痕の規模は大むね40～80cmほどで、バラエティーに富んでいる。また、P72・73の底面にオレンジ色のリンク（第6図P72・73の平面図中の鎖線）がみられ、これが土層断面の柱痕部分に重なっていた。これを木柱が湧水中に含まれている鉄分によって生じた現象とみれば、木柱痕と考えることもできる。これの直径がP72では40cm、P73は80cmと規模が異なっていた。この底面における現象はP20・48・54・65・69・82にもみられた。P70では図示した範囲に鉄分を含んだザラザラとしたかたまりが底面にあり、これも先の現象と同じと思われる。

東地区的ピットは掘立柱式のものが多いが、各ピットの対応関係は柱穴の分布にバラつきがあり、建物跡等を推測することはできず、まとめの段階で推定してみることにする。

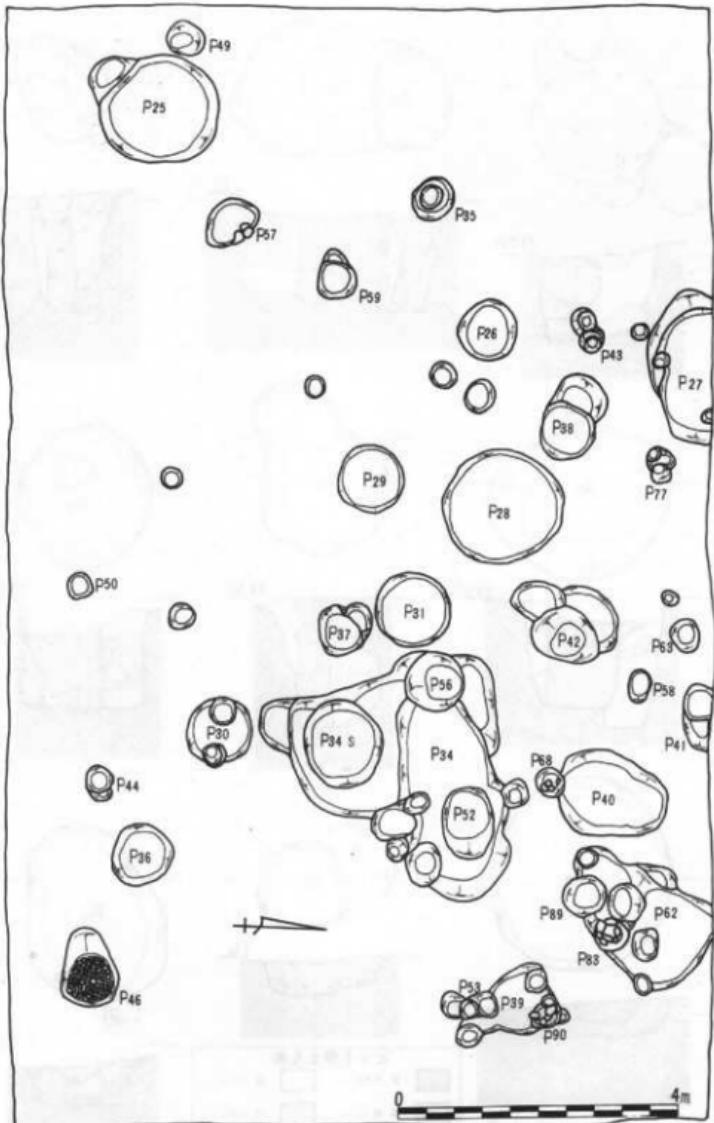
2. 西地区的ピット群（第5図・第6図）

東地区で多い掘立柱式の柱穴は西地区ではP41・42の2基しか、土層断面では確認できなかった。その他、規模は小さくなるが、P68・83は土砂のかわりに礫を用いた、いわゆる根固め石のある柱穴である。これは西地区ではP90、東地区的P18で確認される。いずれも規模はP83とほぼ同じである。

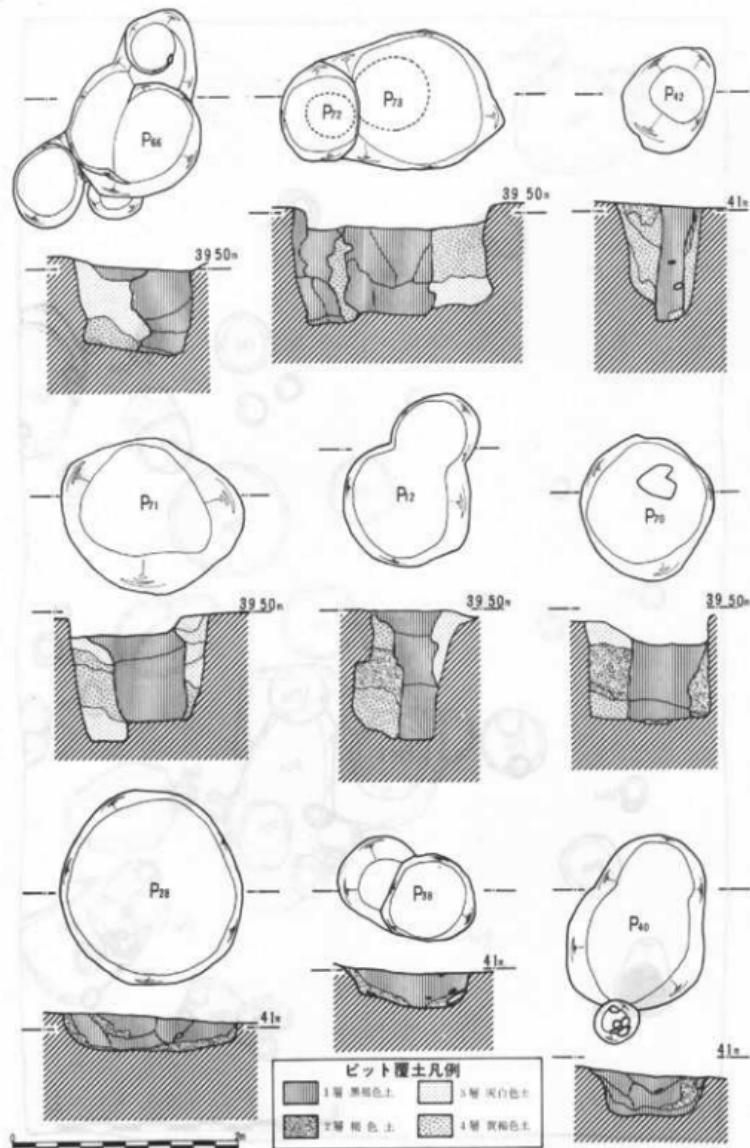
西地区はこのようなピットの他に、P28・38・40のように皿状になっているものが多い。この皿状のピットは確認面からは30cm前後と浅いが、土層断面の観察（第3図上・中）から生活面が、地山面より20～30cm上にあったことを考えれば、60～70cmと深い。この皿状のピットは柱穴の土層断面とは異なり、土砂の堆積がレンズ状を呈しており、規模及び土砂堆積からは貯蔵穴の可能性が高い。



第4図 露I—東地区のピット群



第5図 露I—西地区のピット群



第6図 ピット平面図

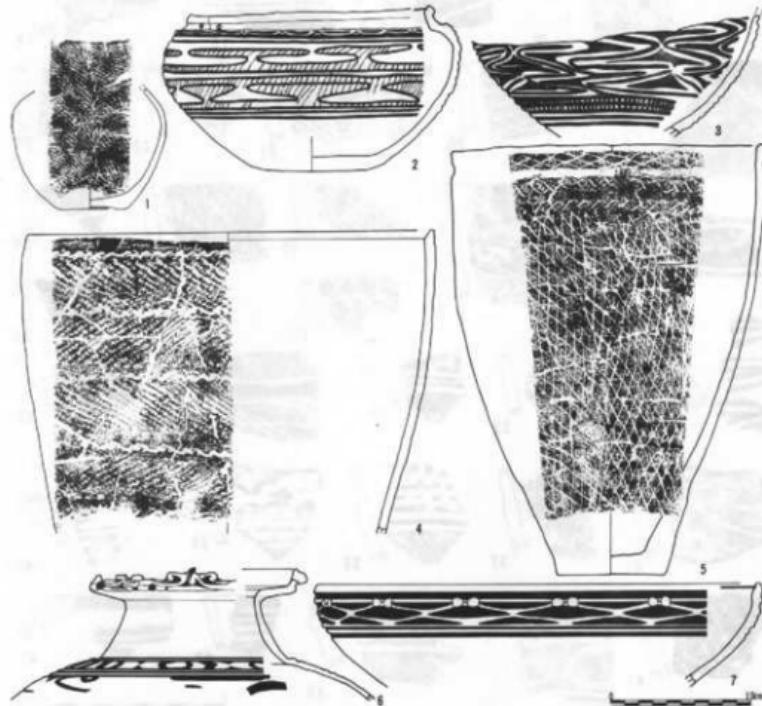
3. ピット出土の土器 (第7図~第10図1~5)

露Iの東・西地区で遺物を出土したピットは約90基ほどがある。その多くは土器の小片であった。ここではピット出土の土器だけをとりあげたが、紙数の関係上、詳細に説明を加えることはできず、次のような表にした。なお、土器分類は「IV 遺物 1 繩文土器」の分類による。分類のうち「中4」は中葉第4類、「粗2」は粗製土器第2類の略で、(8-5)は第8図5の土器をさす。また、「その他」としたのは分類が不明なものである。

ピット	出 土 土 器 の 分 類 [土器分類(挿図番号)]	備 考
1	粗2 (8-1)	
2	後1 (8-2)	
3	前2 (8-3・4) 粗1 (8-7) 粗2 (8-5・6) 粗3 (8-8)	3・4は注口土器か。
4	粗2 (8-9) 粗4 (8-10)	
6	前1 (8-11~15) 前2 (8-16) 前3 (8-17) 粗1 (8-20) 粗2 (8-18・19・21) 粗4 (8-22) その他 (8-23)	23は粗製の条線文の土器
7	中5 (8-24)	
8	粗2 (8-25・26)	
9	粗2 (7-1・8-27)	
11	粗4 (8-28)	
12	前1 (8-29) 粗2 (8-30)	29は小突起口縁
14	後1 (8-31)	
16	粗2 (8-32)	
17	中4 (8-33) 中5 (8-34)	
18	前1 (8-35・36)	
20	粗2 (8-37)	
25	前2 (8-38) 中2 (8-39・40) 粗4 (8-41)	
26	中4 (8-43) 中5 (8-42) 中6 (8-45) 後1 (8-44) 粗2 (9-1)	
27	中3 (9-2) 粗4 (9-3)	3は口縁に平行沈線文と円形刺

28	後1 (9-4・5) 後2 (9-6) 粗2 (9-7)		突文がみられる。
29	中6 (7-2)		4は小形の浅鉢 中6を代表する
30	後3 (9-8)		完形の浅鉢
31	後3 (7-3) 粗2 (9-9)		10-3は浅鉢も しくは蓋形土器
32	粗2 (9-10)		
33	粗2 (9-19)		
34	中6 (9-11) 後1 (9-12-14) 後2 (9-15) 粗2 (7-4, 9-16・17) その他 (9-18)	18は無文に円形 刺突文の土器	
34-S	後3 (9-20)	P 31の土器と同 一個体か	
37	後1 (9-21・22) 粗4 (7-5)		
38	後2 (9-23)		
40	後1 (9-24-29) 粗1 (9-35) 粗2 (9-30・31・ 36) 粗3 (9-32・33) 粗4 (9-34)	35は附加条の繩 文	
41	粗2 (10-3) 粗3 (10-2) 後3 (10-1)		
42	粗2 (10-4)		
43	前1 (10-5)	三叉文であろう	
48	後1 (10-6) 粗2 (10-7)		
50	後1 (10-8)	複合口縁に工字 文風の沈線文	
52	粗1 (10-10) 粗2 (10-9)	10は羽状繩文	
53	粗2 (10-11)		
58	粗2 (10-12)		
59	後1 (10-13) 粗2 (10-14・15)	14は複合口縁	
62	後1 (10-16) 粗2 (10-17・18)	16は山形突起が 口縁にみられる	
63	粗1 (10-20) その他 (10-19)	19は沈線をはさ んで刻目がある	

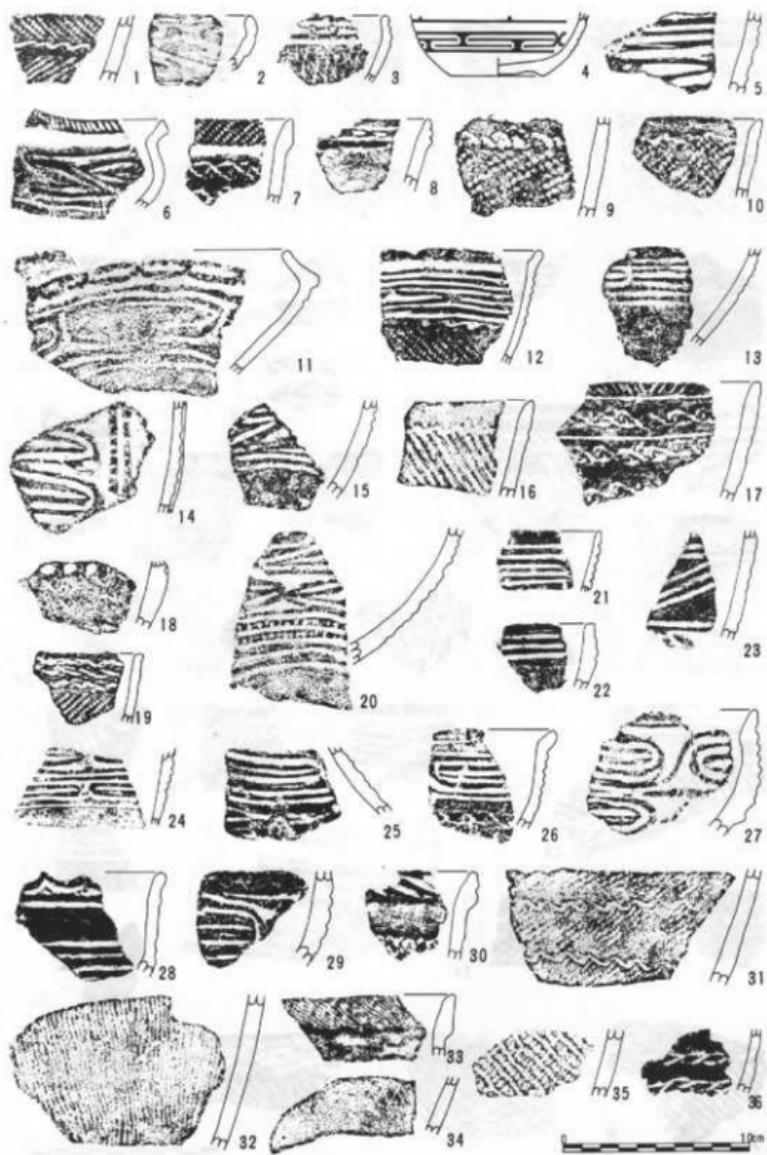
66	粗2 (10-22) 後3 (10-21) か?		
69	粗2 (10-24)	粗4 (10-25)	
70	中4 (10-27)	粗2 (10-28)	その他 (10-26)
71	後1 (10-29・30)	その他 (10-31)	26は格子目状の 条線文
72	粗2 (10-33・34)	その他 (10-32)	31は頸部に刻目、 胸部に条線文
73	後1 (10-35・36)		32は条線文
74	前1 (10-37)	粗2 (10-38~40)	37は山形口縁
76	粗2 (10-41)		



第7図 ピット出土の土器（1～5）及び縄文土器



第8図 ピット出土の土器



第9図 ピット出土の土器



第10図 ピット出土の土器

IV. 遺物

本調査で出土した遺物は縄文時代晩期に限られ、出土量は平箱にして50箱程度である。

1. 縄文土器

縄文土器は晩期前葉から後葉にわたるもので、中葉および後葉のものがその主体を占めている。以下に土器の文様構成および施文技法を基準として分類記述する。

(1) 晩期前葉の土器 (第11図1~20)

大洞BおよびB-C式期に比定される土器群で、出土量は中葉・後葉に比べ非常に少ない。

○第1類 (第11図1~3) 大洞B式併行期の三叉文が施されるグループである。1は波状口縁をなし、北陸地方の八日市新保式の影響がみられる。2・3は東北系の三叉文が施されるもので、焼成は不良で脆くなっている。器形はいずれも鉢形と思われる。

○第2類 (第11図4~9) 羊齒状文が陽刻手法で表現されるグループで、大洞B-C式期に比定される。小破片の為、文様構成の詳細は不明である。9は注口土器の上半部破片と思われる。

○第3類 (第11図10~19) 羊齒状文が陰刻手法で表現されるグループで、第2類同様、大洞B-C式期に比定される。陽刻に比べ文様帶の幅が狭くなっている。14は末端のかみ合わせを残しているが、文様帶が縮小し平行線化が進んでいる。15になると、かみ合う部分は消失し、沈線間に刻目が加えられるだけとなる。器形は鉢形で、内面に炭化物の付着するもの(14・15)が認められる。胴部には斜縄文が施されるもの(14・15・19)や縦方向の燃糸文を地文とし縞格文が加えられるもの(13・16・17)がある。

○第4類 (第11図20) 関東地方の安行3b式に類似するモチーフをもつもので、1点だけ確認されている。小波状口縁をなし、溝巻状に沈線を描いている。器形は鉢形と考えられ、器面は良好に研磨されている。

(2) 晩期中葉の土器 (第11図21~45・第12図・第13図1~18)

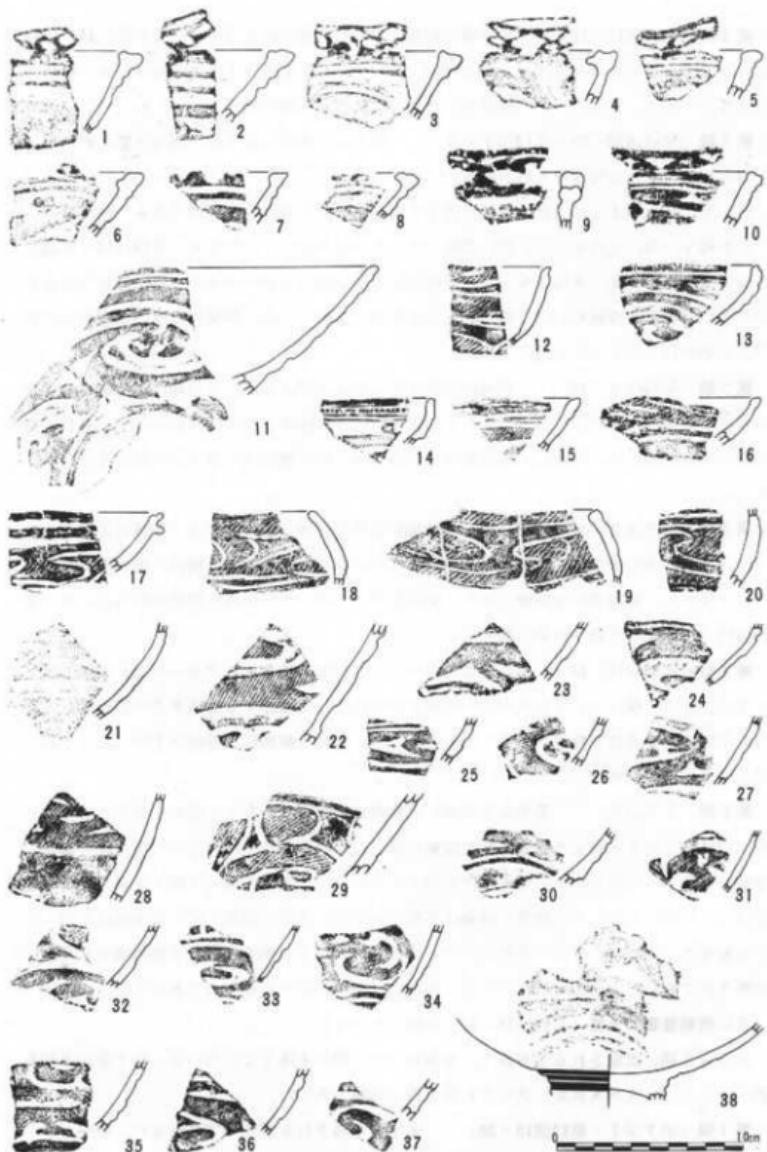
大洞C₁・C₂式併行期に比定される土器群で、主要モチーフとして雲形文が施される。出土量は平箱8箱で、後葉の土器群とともに本調査出土土器の主体をなしている。

○第1類 (第11図21~34) 口縁部に羊齒状文を残し、胴部に雲形文が施されるグループである。羊齒状文は退化して一本の沈刻の帯となっている。22・27のように口唇部に突起を有するものもある。

○第2類 (第11図35~45・第12図1~10) 口唇部に三叉文の沈刻を加えたB突起が連続し、胴部に雲形文を有するグループである。羊齒状文が退化した沈刻の帯は沈線に推移する傾向がみられる。



第11図 繩文土器



第12図 繩文土器

○第3類（第12図11～19） 平口縁で胴部に雲形文の施されるグループである。14の口縁部には退化した半齒状文の沈刻が残り、17には突起を有する列点文が施されている。11は台付浅鉢の一部で、器面は良好に研磨され内面には朱塗りの跡が残る。

○第4類（第12図20～38・第13図1～5） 雲形文が施される土器の胴部・底部破片をこの類とした。38は台付浅鉢と思われる。

第1類～第4類までは大洞C₁式期に比定される雲形文を有する土器群である。そのほとんどが小破片の為、文様単位を正確に把握できるものは少ないが、X字文（第12図11・第13図3など）や大脇骨文（第12図6）などと呼ばれる東北地方と同一のモチーフが想定されるものが多い。器形は浅鉢形および皿形がその大部分を占めている。器面は丹念に研磨されており、丹彩されているものも多い。

○第5類（第13図6～14） 曲線的な動きのあるものではなく、平行線化した動きの少ない雲形文が施されるグループであり、その沈線による区画は工字文に類似している。13・14は同一個体と思われ、大洞C₂～A式前半にかけてみられる綾杉文に通ずる文様が施されている。

○第6類（第7図2・第13図15） 口縁部無文帶の下縁に浮線横円文（眼鏡状浮文）がめぐり、胴部に平行線化した雲形文が施されるものである。第7図2は胴部に細い繩文が地文として残るが、磨消部が不明瞭であり、東北地方のものに比べ描線に稚拙さがみられる。第13図15は内面に炭化物が付着し脆くなっている。

○第7類（第13図16～18） 雲形文モチーフの沈線文が施されるグループで、大洞C₂式期に比定される。横につらなる横円状の枠組が半単位ずつで結合する磨消手法の雲形文が進展^(注1)した文様で、東北地方特有のモチーフといえる。いずれも胴部片で器種は不明である。16・17には丹彩の跡が残る。

○第8類（第7図6） 雲形文を意識した独特のモチーフを有する壺形土器をこの類とした。口縁部には半齒状文を進展させた加飾が施され、胴部には半円および円を沈線で描き、全面を研磨する文様帯がめぐる。半円が向き合う部分で区画され単位文様となる。胴下半部はほとんど残っておらず文様帯の詳細は不明であるが、上部文様帯と同じ施文技法を用いながらもモチーフは異なり、より雲形文に近い文様と思われる。胴部に限らず他の部分も丹念に研磨されており、全面赤彩されている。大洞C₂式期に比定されるものであろう。

（3）晚期後葉の土器（第13図19～41・第14図1～6）

大洞A式期に比定される土器群で、本調査出土土器の主体をなしている。出土量は平箱6箱である。なお、大洞A'式期に比定される土器は皆無であった。

○第1類（第7図7・第13図19～36） 工字文が施されるグループであるが、破片が多く文様構成を把握できるものは少ない。工字文としては、東北系の入組工字文（25・29）や間



第13図 縄文土器

東系の浮線工字文（31・32）など様々なモチーフを有するものが混在している。23は口縁部に縦方向の刻目が加えられている。31は浮線横円文が頭部に残っている。第7図7の菱形の浮線文は長野県水I式との関連を指摘することができる。内面に炭化物が付着しているものが多く、丹彩の跡が残るものもある。

○第2類（第13図37～41） 工字文が施されるものの中で、三角形風の入組工字文を有するものをこの類とした。波状工字文が入組んで文様を構成している。37・42などは良好に研磨され黒色を呈している。

○第3類（第7図3・第14図1～6） 工字文が施される文様帶の上部あるいは下部に列点文がめぐるグループである。1・2は口縁部に工字文が施され、その直下に列点文がめぐっている。3は小波状口縁で列点文の下に入組工字文が展開され、4は平口縁で3と同様のパターンで施されている。5・6は胴部片で2段の列点文が施されている。第7図3は入組工字文の下端に2段の列点文がめぐっている。部分的に丹彩の跡を残すが、器面は粗い。その器形から蓋として機能していた可能性も考えられる。

（4）粗製土器（第14図7～40・第15図）

器面全体に縄文や撚糸文などが施された深鉢形土器で、所謂粗製土器と称されるグループである。炭化物の付着するものが多く、器面は粗く脆い状態である。

○第1類（第14図7～13） 斜縄文や羽状縄文が施されるグループである。口縁部が無文となるもの（8・9）と縄文が施されるもの（7・10）がある。

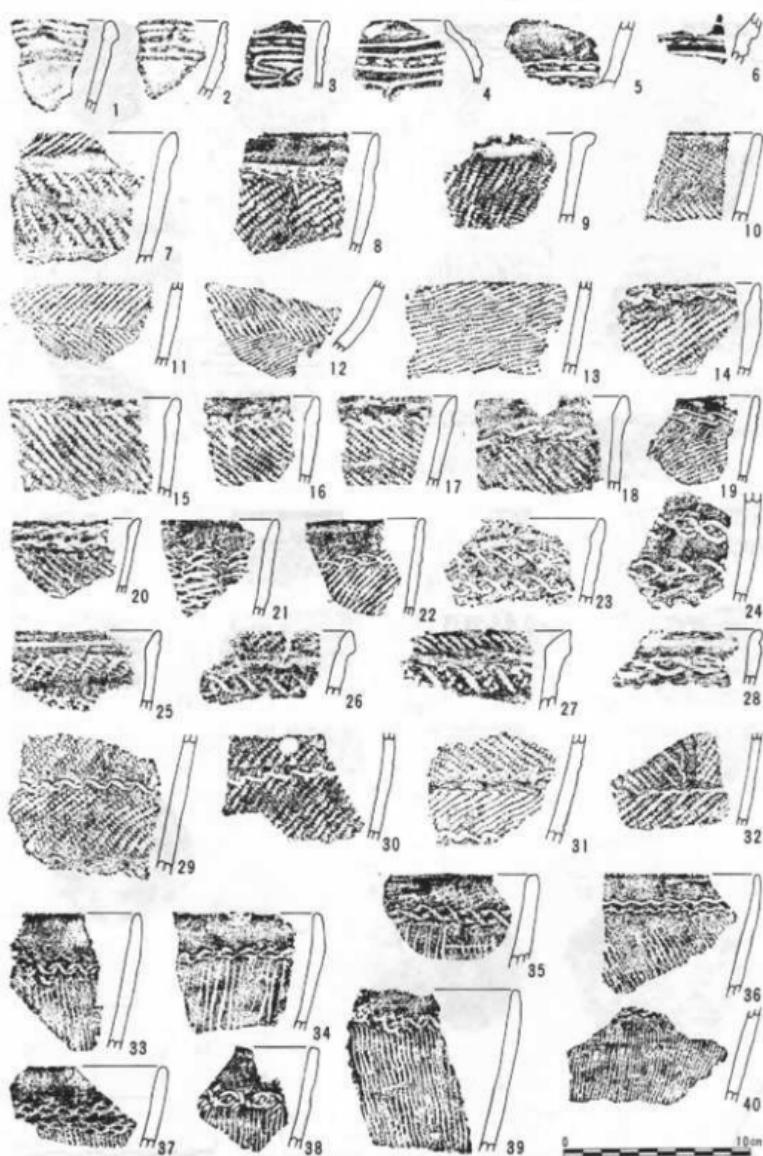
○第2類（第7図1・4・第14図14～32） 綾絡文が施されるグループで、口縁部に狭い無文帯、その直下に綾絡文、斜縄文という順序で施文されるものが多い。口縁が肥厚して段をなすものもあり、その部分には斜縄文・綾絡文・沈線が入る。23～27は太い撚糸による綾絡文が胴部文様の主体となるものと考えられる。29～32は斜縄文・羽状縄文の境界に綾絡文が入る結節縄文である。

○第3類（第14図33～40・第15図1～11） 撥糸文が施されるグループである。口縁部には無文研磨されるもの、沈線や横方向の撚糸文が加えられるものがみられる。口縁部直下に綾絡文の入るものが多く、胴部には縦方向に撚糸文が施されている。

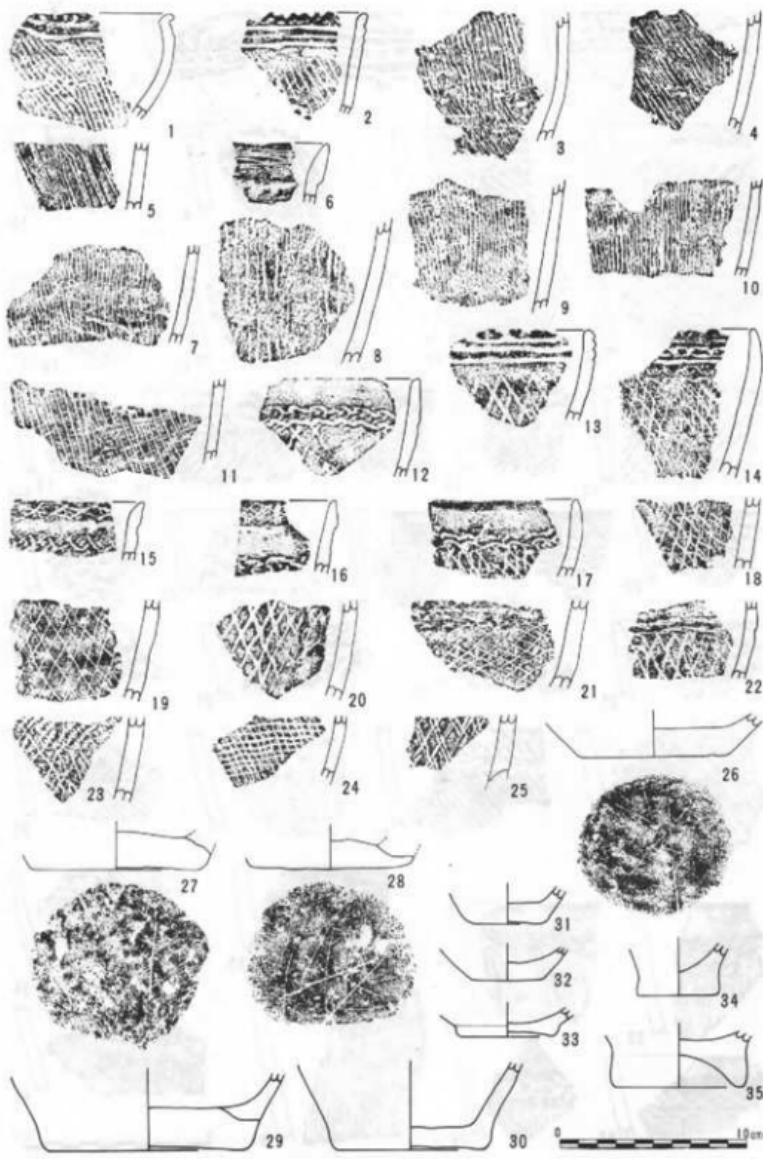
○第4類（第7図5・第15図12～25） 網状文を有するグループである。口縁部は無文研磨されるもの、肥厚した段に網状文が施されるもの、沈線間に刺突が加えられるものがあり、胴部には縦方向の網状文が施文される場合が多い。

○第5類（第15図26～35） 粗製土器の底部破片をこの類とした。その大部分は平底の深鉢である。34・35は細身の深鉢、32・33は浅鉢で、26～28は底に木葉痕を残している。

註1. 安孫子昭二「第三節 龜ヶ岡文化」「村山市史 別巻一」村山市 1982年



第14図 繩文土器



第15図 縄文土器

2. 石器（第16図・17図・19図）

今回の発掘で出土した石器には、石鎌・尖頭器・石錐・板状石器・石匙・石斧・石錘・凹石・磨石・敲石・石皿・スクレイバーの12種類があり、その総数は296点におよぶ。石鎌や板状石器はかなりの数量出土しており、逆に石錐・石匙などは非常に少ない。出土した石器のうち27点にピッチ痕がみられる。

○石鎌（第16図1～26） 103点出土。そのうちピッチ痕のあるものは24点であった。晩期になると石鎌の出土が多くなる傾向は本遺跡についてもいえる。これらの石鎌を分類すると、平基有茎式で鎌身が基辺にむかってあまりひらかないもの（1～5）・比較的ひらくものの（6～9）・凹基有茎式（10）・凹基無茎式（11～13）・凸基有茎式（14～19）・凸基無茎式（20～23）・異形（24～26）の7種類である。^(註1) 24・26はとくに注意を要する。

○尖頭器（第16図27～30） 11点出土。そのうちピッチ痕をもつものは1点である。石質は頁岩・安山岩などである。

○石錐（第16図31～33） 18点出土。ピッチ痕は31の一点のみにある。33は他と形態が異なるが、原石表面を一部に残し、刃部の断面は三角形で先端は比較的鋭く、石錐とみられる。

○板状石器（第17図1～15） 扁平な石の周囲を打ち欠いて刃部をつくった石器で、56点出土した。これらの多くは、片面だけを重点的に打ち欠いたものであるが、4のようにある程度両面を打ち欠いたものもある。おおまかに形態分類すると、円形に近いもの（1～3）・ほぼ三角形（7・8）・四角形（9～11）・大形で四角形（12・13）・椭円に近い二等辺三角形（14・15）・その他の6種類になる。石質は泥板岩が多いが、13・14のように安山岩系のものもある。

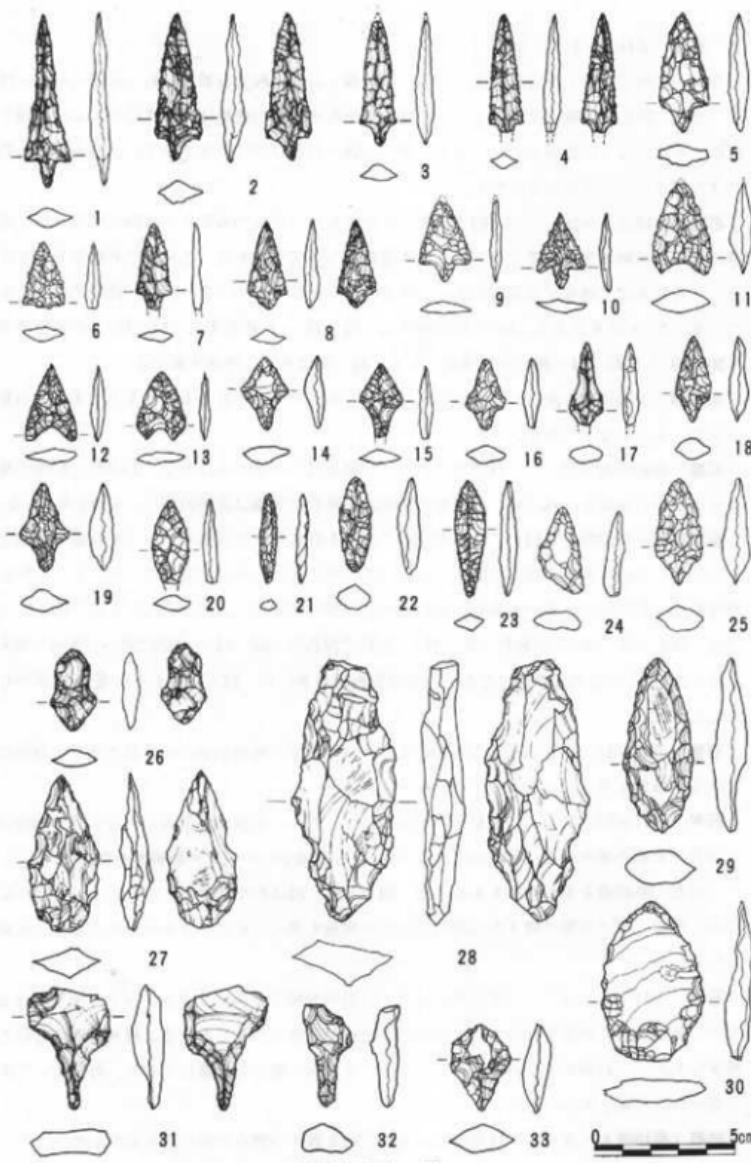
○石匙（第17図16） 出土した石匙は1点のみである。板状石器の出土数の多さと対照的である。横形を呈しており、ピッチ痕がみられる。

○石斧（第17図17～26） 磨製石斧が37点出土したが、打製石斧はみられない。実測図の矢印及び刃部の細かい線は研磨の方向を示す。かなり細かいが多くの研磨面を観察できる（とくに刃部）。敲打痕をもつものもある（23・24など）。23はかなり使用したらしく刃こぼれが認められる。21は刃部の様子から敲石としての用途も考えられる。小形と大形の2種に大別される。

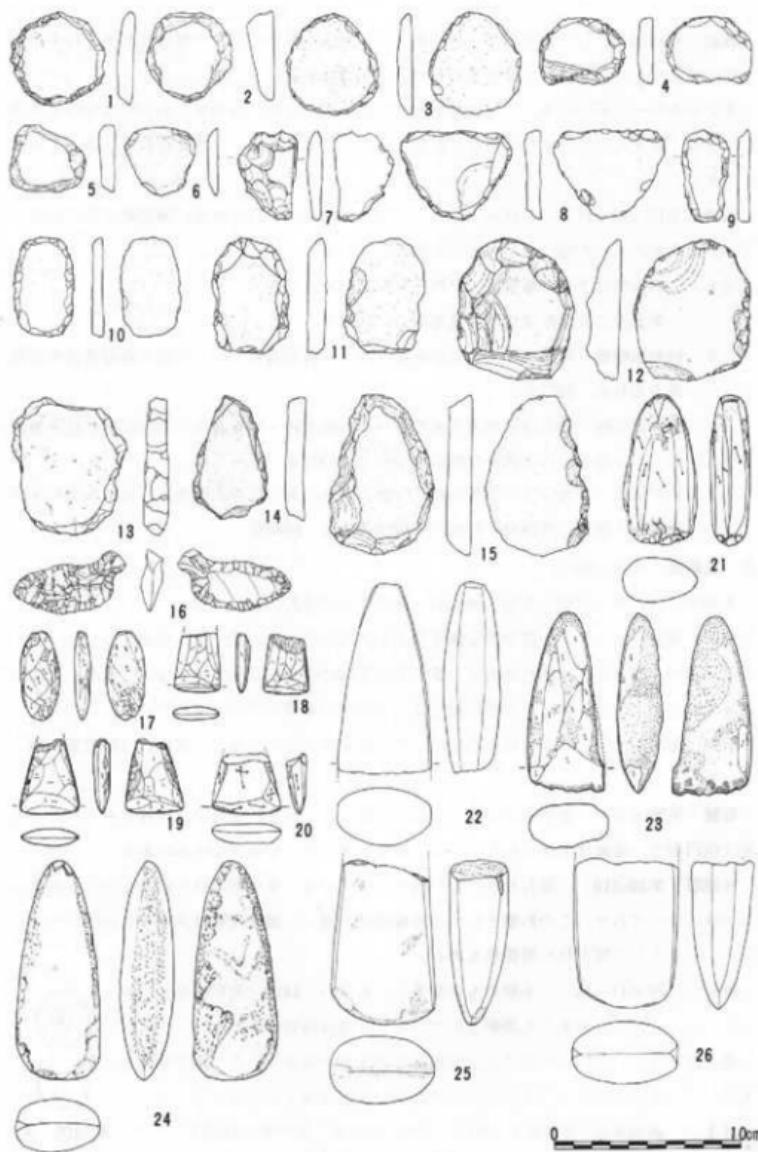
○石錘（第19図1～3） 4点出土した。以前の発掘でも出土は2点のみで、出土例は少ない。扁平な石の両端を打ち欠いただけの単純な砾石錘と思われる。2は板状石器にも似た簡単なもので、石錘かどうかはっきりしない。3は表・裏とも研磨してあり、打ち欠いてある部分から石錘とみられる。

○凹石（第19図4・5） 11点出土。両面に約2個ずつ凹みがみられるものが多い。

○磨石（第19図6・7） 33点とかなり出土した。丸みを帯び全面よく研磨されている。



第16図 石 器



第17図 石 器

○敲石（第19図8） 3点出土した。8は一見磨石のようだが、一部に自然面を残すほか全面に敲打痕がみられ、よく使用されている。石質は頁岩。

○スクレイパー（第19図9） 分銅型石斧のようであるが、新潟県においては分布が希薄なことや、断面が台形を呈していることなどから、スクレイパーと考えられる。この1点のみ出土した。

○石皿（第19図10・11） 18点出土した。10は片面のみ、11は両面に使用痕がみられる。図示した大形のもの他に小形のものも出土している。

註1. この分類は下記の報告書のP70～P73をもとにした。

「紫雲出」託間町文化財保護委員会 1964年

2. 駒形敏朗他「埋蔵文化財発掘調査報告書——藤橋遺跡——」長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年

駒形敏朗他「埋蔵文化材調査報告書——藤橋遺跡・尾立遺跡・田富岡農学校跡遺跡——」長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年

3. 駒形敏朗『長岡市立科学博物館に寄贈・照会のあった考古遺物』「長岡市立科学博物館研究報告 第18号」長岡市立科学博物館 1983年

3. 石製品（第18・20図）

本調査では石棒・石剣・石冠・独鉛石・砥石・玉が出土した。

○石棒（第20図1～7） 部分的な断片のみが出土した。1・2・3は頭部とみられ、1・2には線刻、2・3には抉れがある。5・7は先端に向かって先が細くなっている。7には線刻が施されている。各々の欠損の具合は、各石材の層理の方向に割れている。

○石剣（第20図8） 断面は扁平形を呈している。少々反りきみで、側面には敲打痕が残っている。

○石冠（第20図9） 磨石石斧のようによく研磨されており、先端には棱線がみられる。底部は梢円形で、底面は大きく凹んでいる。側面の2ヶ所にも小さな凹みがある。

○独鉛石（第20図10） 敲打法により製作されている。中央部は抉られたように、頭部は半球状になっており、この形態としては出現時期が遅い。頭部先端は両端とも凸凹になっており、敲石として使われた可能性もある。

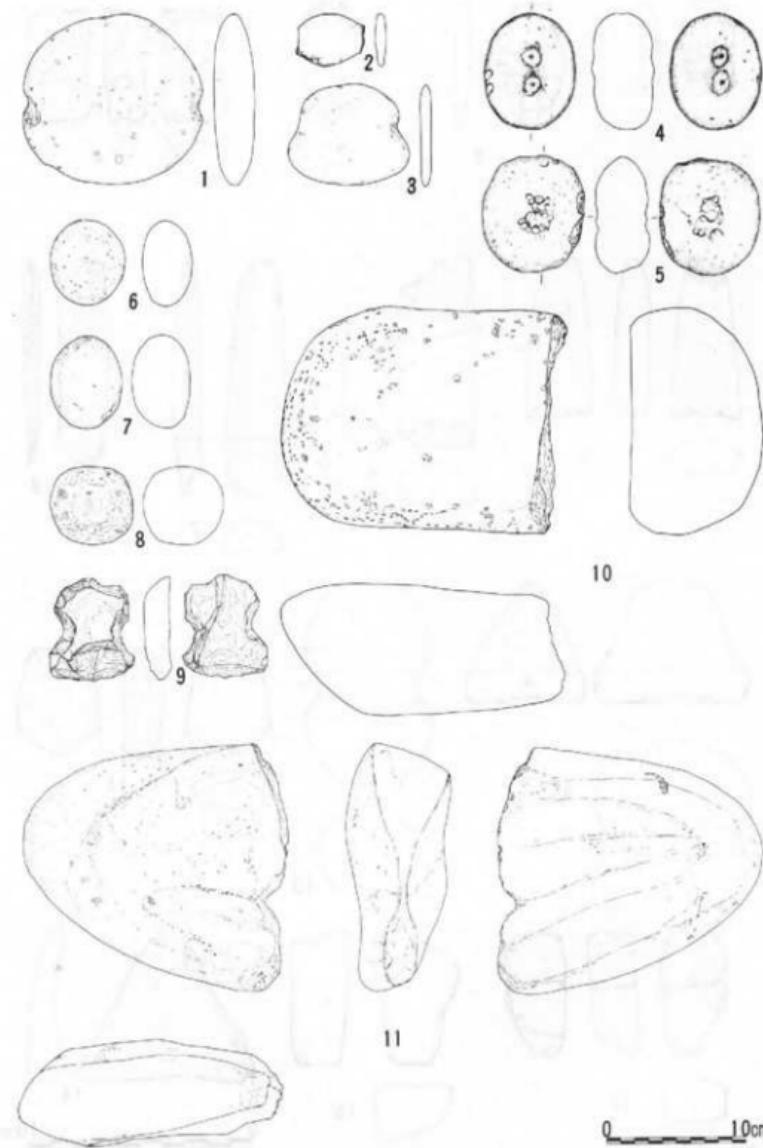
○砥石（第20図11～14） 小型のものが多く、もろい。14は三角形を呈し1点が反り返っており、表裏とも研磨されている。石質は砂岩のみ。

○玉（第18図） 今回の調査では、玉類はこの1点のみ出土した。翡翠製の小玉で、さっそくは上面からの1方向だけである。上面は面どりがされている。

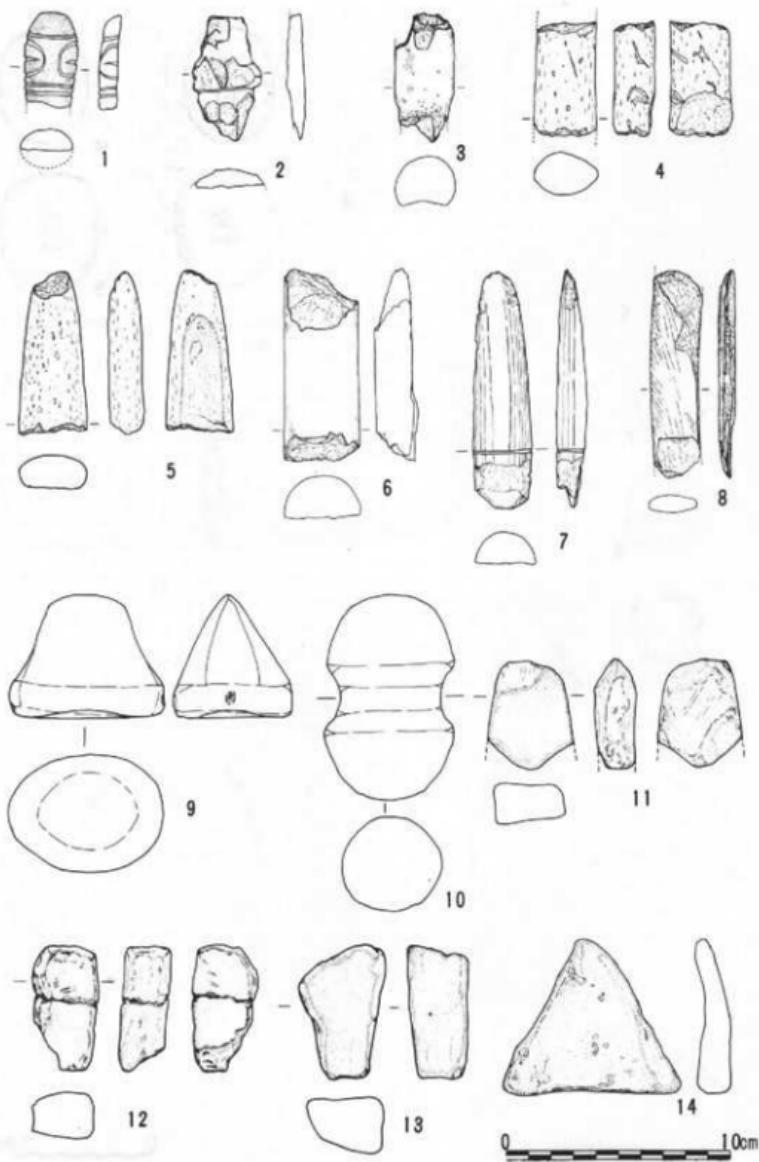
註1. 「新潟県史 資料編1 原始・古代一考古編」新潟県、1983年

第18図 玉





第19図 石 器



第20図 石製品（1～10）・磁石（11～14）

V. ま　と　め

1. 土器について

(1) 本調査出土土器について

本調査で出土した土器はいずれも縄文時代晩期（大洞B～A式期）に比定される。土器に施された文様を中心として、各時期における特色を抽出し考察を加えてみたい。

前葉の土器群には三叉文および羊歯状文が施されている。三叉文の段階（大洞B式併行期）では、東北系のモチーフを有するものに加えて北陸系（八日市新保式）の影響が認められるものが少量ではあるが出土している。前回の調査においても八日市新保式や勝木原式といつた北陸の諸型式との関連が指摘されている。^[註1] 大洞B-C式期に盛行する羊歯状文が施されるものには陽刻手法で表現される場合と陰刻手法で表現される場合があり、陰刻は陽刻の簡略化されたものと捉えられ、文様の進展の過程を伺うことができる。

中葉の土器群では雲形文がその主要モチーフとなる。大洞C₁式併行期には東北地方と軌を一にする雲形文が用いられ、羊歯状文が口縁部に加飾として残るものもある。大洞C₂式併行期に入ると動的なモチーフを有していた雲形文が平行線化の傾向をみせ、その区画は工字文に近いものに変化する。中葉第7・8類のように独特な施文技法をもつものも現れる。^[註2] 第5・6類の文様構成を想定した場合、三条市上野原遺跡出土土器と共通するものが多く、C₂式でも新しい方に位置づけられる可能性がある。

後葉の土器群は大洞A式期に比定される一群で、A式期に属するものは出土していない。工字文が主要モチーフとなる段階であるが、東北地方に通有する工字文と関東地方にその中心をもつ浮線工字文が混在する状況を示している。東北系の工字文はその入組み方によって様々なパターンの文様が表現されている。

精製土器は破片資料が多く、文様構成や器種構成などに関する詳細な分析を行うことはできなかったが、いずれの時期においても亀ヶ岡文化圏の諸型式にみられる特色が確認される。

粗製土器には深鉢形が多く、縄文・撚糸文・綾格文・網状文が施される。特に綾格文を部分的に施文するものが目立つ。その出土状況から精製土器との共伴関係を明らかにすることはできず、粗製土器の時期的な特色は不明であった。

(2) 新潟県における晩期土器の情勢との関連

前述した特色を踏まえて、藤橋遺跡出土の土器を県内の晩期土器の地域的・時期的な動向の中で捉えてみたいと思う。対象とする時期は、本遺跡出土土器の比定時期に合わせて大洞B～A式併行期とする。

新潟県は東北地方南縁地域として、晩期の全期間を通して亀ヶ岡文化圏の影響を受けてい

る。しかし、県内全域で画一的な状況が確認されてい

るのではなく、地域によって土器様相が異なることが指摘されている。^(注3) 大洞B～A式併行期の様相を概観した

場合、第21図に示されるように上越地方では東北系の土器よりも、近接する信州・北陸地方の影響を受けた土器が主体をなしている。この地域

には信州系の色彩^(注4)が濃い中郷村奥ノ

^(注5) 城・妙高村藤生遺跡や北陸地方との結びつきが強い糸魚川市細池・青海町寺地遺跡が所在し信州・北陸の諸型式にみられる文様要素(鍵の手文・列点文・粗大工字文など)が共通して施されている。東北系のモチーフを有する土器も存在するが、亀ヶ岡式土器の規格から逸脱した地方色の強いものとなっている。この様相は浦川原村顕聖寺遺跡まで認められる。それに対しても藤橋遺跡の所在する中越地方や下越地方では、東北地方の諸型式に準じた継続的な変遷を伺うことができるが、大洞A式併行期に入ると関東地方を中心とした浮線工字文土器が介入して地域的に展開する。浮線工字文が顕著に確認されている遺跡(第21図●印)には、新発田市村尻・栄町長畠・見附市耳取・出雲崎町乙茂飯田遺跡などがあり、東北系のモチーフをもつ工字文土器と混在した出土状況を示している。東北系の工字文と浮線工字文の編年的位置づけが今後重要な課題となるであろう。また、浮線格円文を伴い擬似工字文が施される土器が大洞C₂式期の新段階で存在することから、大洞A式期の変動の前兆をその前段階に求めができるのではないか。これらの問題は、藤橋遺跡出土土器についても指摘されることであり、工字文土器の成立・発展の過程を明らかにするために充分検討されなければならない。

遺跡凡例

1. 藤 橋 尾
2. 村 尾
3. 島 尾
4. 上 野 原 畑
5. 長 畠
6. 乙 茂 飯 田
7. 耳 取
8. 頭 聖 寺 城
9. 奥 ノ 生 池
10. 藤 生 池
11. 細 地
12. 寺 地



第21図 繩文晚期の地域圖想定図

(註6) (註7)

城・妙高村藤生遺跡や北陸地方との結びつきが強い糸魚川市細池・青海町寺地遺跡が所在し

(註8)

信州・北陸の諸型式にみられる文様要素(鍵の手文・列点文・粗大工字文など)が共通して施されている。東北系のモチーフを有する土器も存在するが、亀ヶ岡式土器の規格から逸脱した地方色の強いものとなっている。この様相は浦川原村顕聖寺遺跡まで認められる。それ

に対しても藤橋遺跡の所在する中越地方や下越地方では、東北地方の諸型式に準じた継続的な変遷を伺うことができるが、大洞A式併行期に入ると関東地方を中心とした浮線工字文土器が介入して地域的に展開する。浮線工字文が顕著に確認されている遺跡(第21図●印)には、

(註9)

(註10)

(註11)

(註12)

新発田市村尻・栄町長畠・見附市耳取・出雲崎町乙茂飯田遺跡などがあり、東北系のモチーフをもつ工字文土器と混在した出土状況を示している。東北系の工字文と浮線工字文の編年的位置づけが今後重要な課題となるであろう。また、浮線格円文を伴い擬似工字文が施される

(註13)

土器が大洞C₂式期の新段階で存在することから、大洞A式期の変動の前兆をその前段階に求めができるのではないか。これらの問題は、藤橋遺跡出土土器についても指摘されることであり、工字文土器の成立・発展の過程を明らかにするために充分検討されなければならない。

県内で確認される晩期の土器様相の概要をまとめてみたが、そこには亀ヶ岡文化圏に含まれながらも、実際には地域的・時期的に複雑な変遷がみられる。他の土器文化圏との関係を捉え、地域ごとに土器様相の推移を追求することによって、マクロな視点からその全体の動向を明らかにしていく必要があるだろう。

- 註1. 駒形敏朗他「埋蔵文化財発掘調査報告書—藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡—」
長岡市教育委員会 1977年
2. 三条商業社会科クラブ考古班「三条 上野原 繩文晩期」 1968年
3. 「新潟県史 資料編1 原始・古代一」 1983年
4. 室岡博「奥の城（西峯）遺跡 第一次調査報告書」中郷村教育委員会 1982年
5. 中川成夫編「藤生遺跡」立教大学博物館学講座 1967年
6. 寺村光晴他「細池遺跡」糸魚川市教育委員会 1974年
7. 註3と同じ
8. 中川成夫編「顯聖寺遺跡」浦川原村教育委員会 1959年
9. 関雅之他「村尻遺跡I」新発田市教育委員会 1982年
10. 戸根与八郎他「上越新幹線埋蔵文化財発掘報告書」新潟県教育委員会 1975年
11. 関雅之「耳取遺跡」見附市教育委員会 1971年
12. 寺村光晴「新潟県乙茂飯田遺跡と出土遺物について」「石器時代第4号」1957年
13. 中島栄一「新潟県三条市上野原遺跡出土土器について」「信濃22-4」1969年

2. 石器について

A表は、今回の発掘での石器の組成についてまとめたものである。本県では、石器組成に関する具体的な分析があまり行われていないため、この表を他の遺跡と比較することは難しいといえる。したがって、確定的なことは言えないが、次の4点の特徴が指摘される。

第1点は、石鏃の出土が極めて多いことであり、尖頭器を含めると、狩猟具としては全体の35%を占める。形態的な特徴として、平基有茎で細長のものが多い（第16図1～5）。

第2点は、板状石器が石鏃に次いで多量に出土することである。解体具としての用途が考えられるが、石匙やスクレイパーが1点ずつしか出土していないことと深い関係があるよう（註1）に思われる。これら板状石器は、長岡周辺での分布密度が非常に高い。

第3点は、植物調理具である磨石・石皿・凹石が割合よく出土していることである。また、敲石とセットで機能を考えると、堅果類の製粉が行われていたと思われる。

第4点は、石錘の出土数が4点と、わずかであったことである。

以上のことは直接生業に関することであり、さらにそれについてこの表をまとめると、Bのグラフのような結果が得られる。それによると狩猟具・漁撈具、植物調理具の割合がほぼ

31: 1: 18となり、狩猟、植物採集が盛んで、漁撈は活発でなかったことがうかがえる。

この理由として、この地域が狩猟に恵まれ、且つ植物資源が豊富だったことを物語るものであろう。漁撈については、本遺跡が河岸段丘上に位置し、多賀屋敷遺跡（中・後期）^(註2)のような近くの漁場には恵まれなかつたからとも考えられるが、本遺跡^(註1)と同じ上富岡面に位置する岩野原遺跡（中・後期）からは、約400点もの石錐が出土しているし、それより上位の関原面に位置する三十稻場遺跡^(註3)（後期）でも、数十点の出土が報告されている。これによりその原因が、立地よりも時期的な問題にあるとも考えられる。実際、晩期^(註4)の朝日遺跡からは、石錐の出土は報告されていない。

註1. 胜敏郎「埋藏文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡」

長岡市教育委員会 1970年

2. 胜敏郎「多賀屋敷遺跡調査報告書」越路町教育委員会 1983年

3. 中村孝三郎「三十稻場遺跡調査報告書」長岡市教育委員会 1970年

4. 中村孝三郎・小林達雄「朝日遺跡調査報告書」越路町教育委員会 1965年

A. 本調査出土石器組成表

	用 途	器 種	出 土 数	%
石 器	狩 猎 具	石 鐵	103	31.987…
		尖 頭 器	11	3.416…
	漁 撈 具	石 錐	4	1.242…
		磨 石	33	10.248…
	調理具	石 盆	18	5.590…
		凹 石	11	3.416…
		敲 石	3	0.931
		板 状 石 器	56	17.391…
	動物 食料	石 匙	1	0.310…
		スクリイバー	1	0.310…
	工 具	磨 製 石 片	37	11.490…
		砥 石	26	8.074…
		石 錐	18	5.590…
	計		322	100
石 製 品	呪術的な道具	石 棒	19	79.166…
		石 刺	2	8.333…
		石 冠	1	4.166…
		独 鑿 石	1	4.166…
	装 身 具	小 玉	1	4.166…
	計		24	100

B. 生業に関する石器の割合

(100%)

狩猟具 (62%)	漁撈具 (2%)	植物食料調理具 (36%)
-----------	----------	---------------

3. 遺構について

今次調査で遺構を発掘したのは、遺構の露出展示を目的として調査を行った露Iの東・西地区の2ヶ所である。検出した遺構はピットだけで、露出展示に最適と思われる竪穴式住居

跡や石囲炉などは発見されなかった。

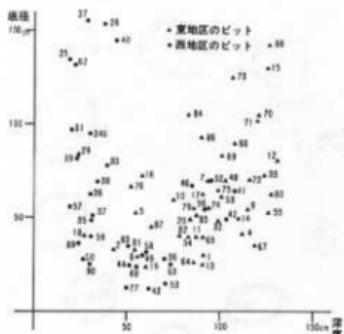
ピットは100基近く発見されているが、調査時において性格づけを推測したのは、掘立柱式14基、貯蔵穴8基、それに根固め石のある柱穴4基の計26基だけである。これはピットが重複していたり、土層断面が観察できないほどに規模の小さいピットが多かったりしたためである。特にP6などのように平面プランが大きいものの、底面で新たにピットが重複して発見される場合が多くあった。このため、法量が把握しやすいピット底面の直径と深度を計測して、規模の面から掘立柱式の柱穴や貯蔵穴などに分類ができるかをさぐり、特に掘立柱式の柱穴を推測して机上で建物跡を復元してみたい。

第22図は露Iで検出されたピットのうち、P6・34など規模が大きいものを除いたピットの底面直径と深度の測定値をグラフにしたものである。これによると、掘立柱式の柱穴は底径が40~120cm、深度が80~130cmの範囲にあり、かつ底径が70cm以下に集中している。また、貯蔵穴と推定したピットは、底径が60~150cm、深度が20~45cmである。根固め石の柱穴は根固め石がないければ判断することはできないが、底径が25~40cm、深度が25~55cmである。

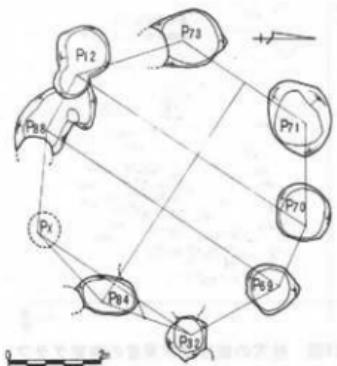
グラフに基づいて三種の数値エリアをみてきたが、これから各ピットごとに分類すると次のようになる。掘立柱式の柱穴はP4・7・9・10・11・14・17・32・33・46・52・53・55・56・74・75・79・80・84~86の21基が新たに加わる。皿状ピットはP34S・38・39の3基、根固め石の柱穴はP2・8・31・44・50・59・89の7基である。

このうち、掘立柱式の柱穴の数値エリアにあるピットを使って、東地区にあるP84の中点とP71・73との中点を中軸線として建物跡を強引に想定するならば第23図のようなものが描ける。もちろん、この想定にはピット内の土器の所属年代を晚期というだけで、細分した編年観を考慮せずにいたし、さらに大きくなれば調査時に検出されなかったPXを位置させるなど、かなりの無理がある。現時点ではこれ以外に柱間寸法などに法則を見い出せず、建物跡を想定することは調査者にはできなかった。

この強引に想定した建物跡は9角形を呈し、ほぼ円形に近いプランである。このように掘立柱式の柱穴での建物跡は、藤橋に近い岩野原で礫もしくは土砂で根固めをした掘立柱式の柱穴による6角形と長方形のプランの5棟分がある。その位置は集落の開口部に2棟ずつと集落の中央部近くに1棟あった。時代は縄文後期で、岩野原には炉跡及び竪穴式住居跡が80



第22図 柱穴の底径及び深度の測定グラフ



第23図 露Ⅰ東地区の想定建物跡

基近く発見された。また、掘立柱式の柱穴ではないが、金沢市チカモリ遺跡では正方形・長方形・正円形のプランを構成する本柱痕^(註2)が発見されている。チカモリ・岩野原ともに柱間寸法などに法則があり、中軸線で折り返せば各柱穴もしくは本柱痕が重なり合う。そこで、藤橋も中軸線をもとめてから第23図の建物跡を強引に想定したのである。しかし、これは非常に無理がある想定で、今次調査では建物跡を構成する要素はなかったと言わねばならない。

ところが、藤橋の露Ⅰの東地区では30基の掘立柱式の柱穴が群在している事実がある。

これはどうしてなのだろうか、という疑問が出てくる。ここで岩野原例を考え合わせながら、藤橋の掘立柱式の柱穴についての仮説を少し大胆に述べてみたい。

岩野原例は聚落内の位置や、5:83という数的な面からも特殊な存在であった。しかも、建物跡のプラン内には炉跡が存在しない。藤橋の炉跡は昭和51年の第2次調査で第2地点に^(註3)埋甕炉が1基あるだけで、今次調査地の第1地点は第3次調査及び今次調査でも発見されていない。このことから、縄文後期の段階では岩野原例のように特殊な存在であった掘立柱式の建物が、晩期になって藤橋では普遍的に採用されたと考えることもできるであろう。そして、藤橋は数回の建て替えをやった結果として、第3次及び今次調査で100基以上の掘立柱式の柱穴が検出された事実に結びつくのではないだろうか。

だが、第3次調査の報告書でもふれたが、県内の縄文晩期には竪穴式住居跡の発見例が存在していることも注意しなければならない。藤橋の調査はこれまで4次にわたっているものの、調査面積は遺跡全体の1割にも満たない狭い範囲であり、今後、何らかの方法で遺跡全体の聚落構成を知ることができれば、先の仮説が幻に終わらない可能性を残している。早くその日の来るこことを期待したい。

註1. 駒形敏朗他「埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡」長岡市教育委員会 1981年

2. 南久和「金沢市新保本町チカモリ遺跡一遺構編一」金沢市教育委員会 1983年

3. 駒形敏朗他「埋蔵文化財調査報告書—藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡一」

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年

4. 駒形敏朗他「埋蔵文化財調査報告書—藤橋遺跡一」長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年



調査風景



調査風景



石冠出土状況



独鉛石出土状況

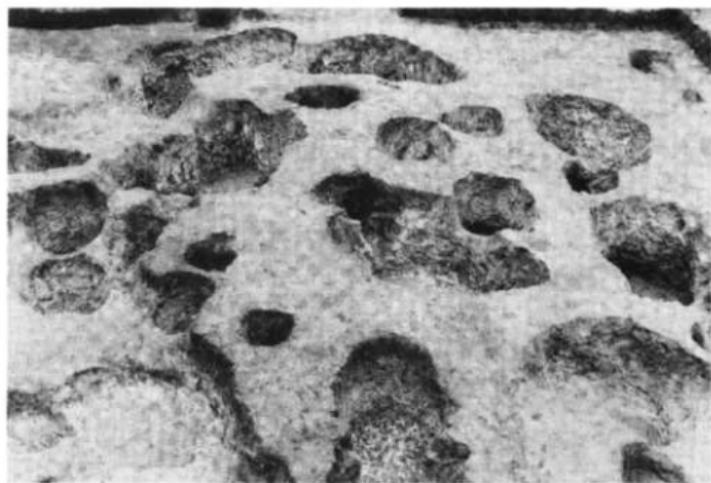


露 I—P29の土器出土状況

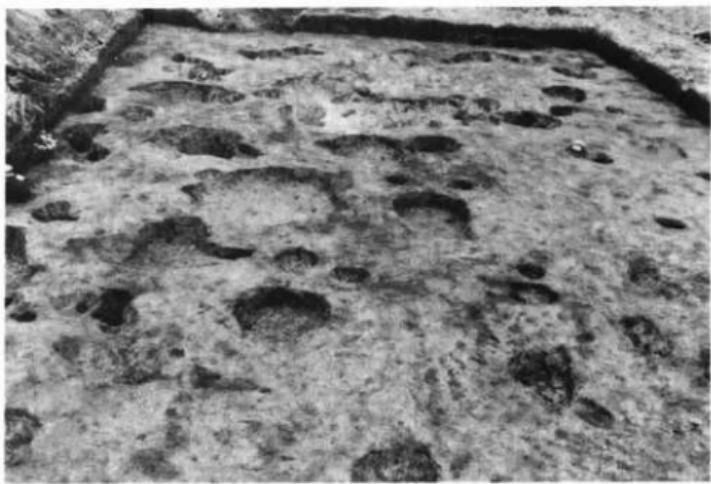


露 I—P 9 の土器出土状況

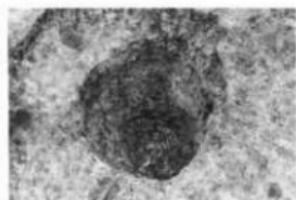
図版第2図



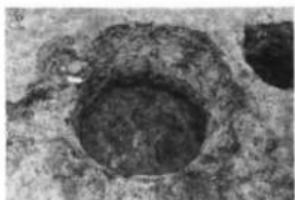
露Ⅰ—東地区のピット群



露Ⅰ—西地区のピット群



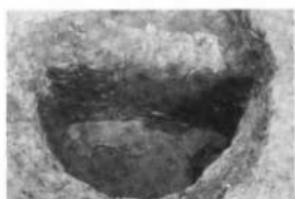
P42



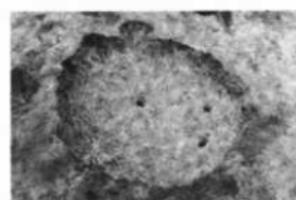
P70



(掘立柱式の柱穴)



(掘立柱式の柱穴)



P28



P27
(皿状のピット)



(皿状のピット)



P83
(根固め石の柱穴)

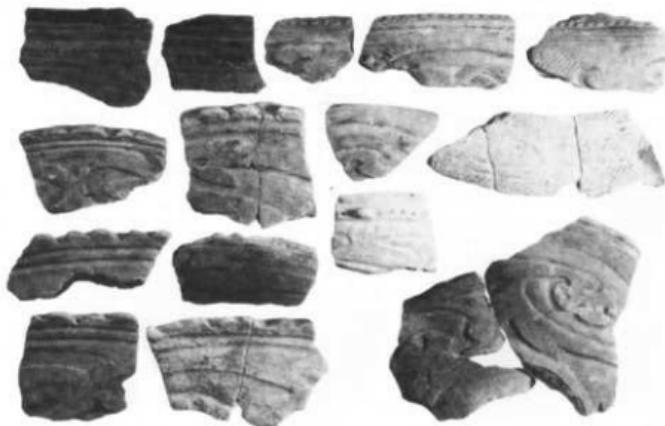
図版第4図



藤橋の土器



縄文晚期前葉の土器



縄文晚期中葉の土器

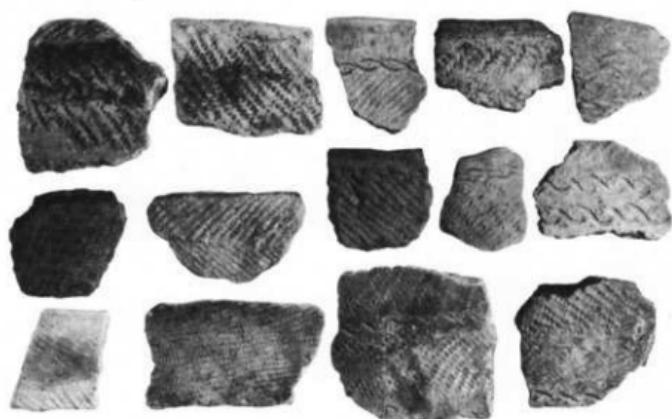
図版第6図



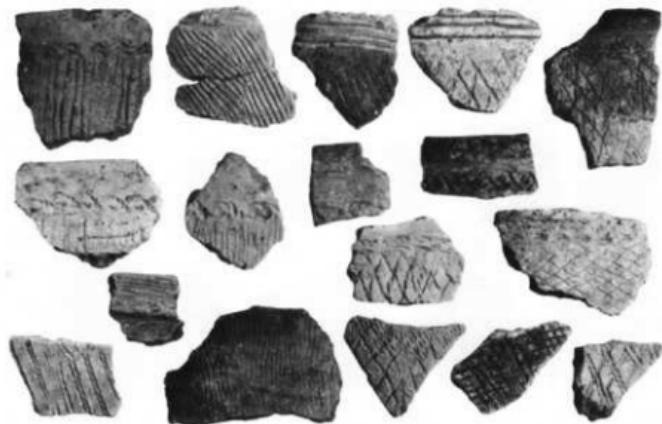
縄文晩期中葉の土器



縄文晩期後葉の土器

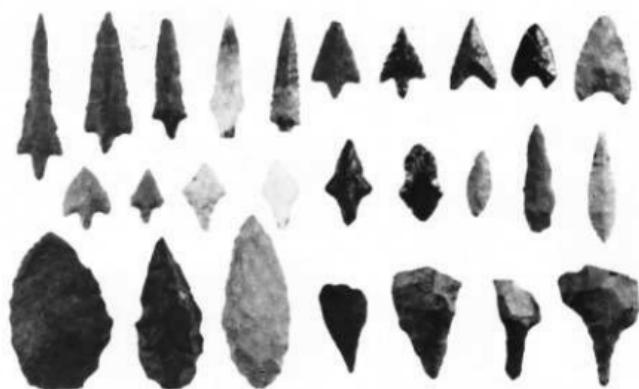


縄文晚期の粗製土器



縄文晚期の粗製土器

図版第8図



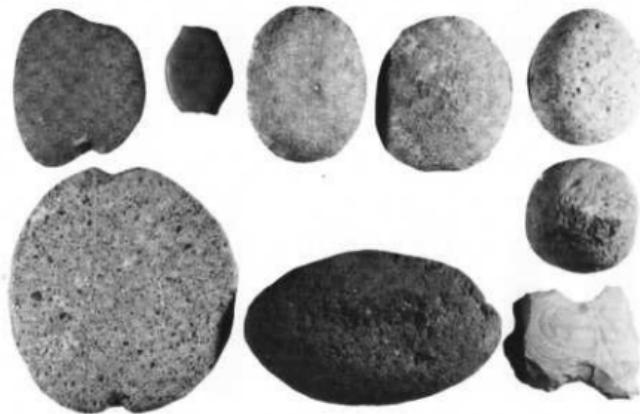
石鏃・ポイント・石錐



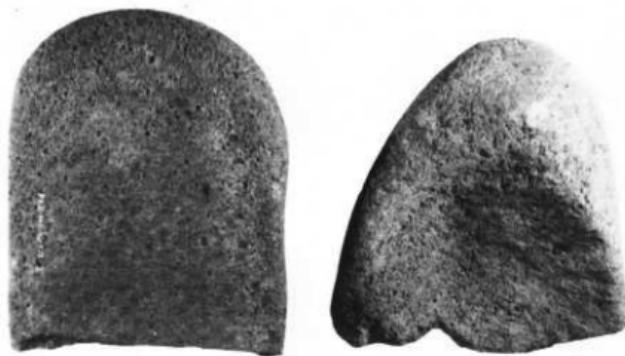
板状石器・石匙



磨製石斧



石錘・磨石・叩石・凹石・スクレバー



石 盆



石棒・石劍・石冠・独鉛石

藤橋遺跡

—史跡整備事業に伴う発掘調査—

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 長岡市教育委員会

印刷 梶合印刷 KK 中 越

長岡市学校町3-9-5